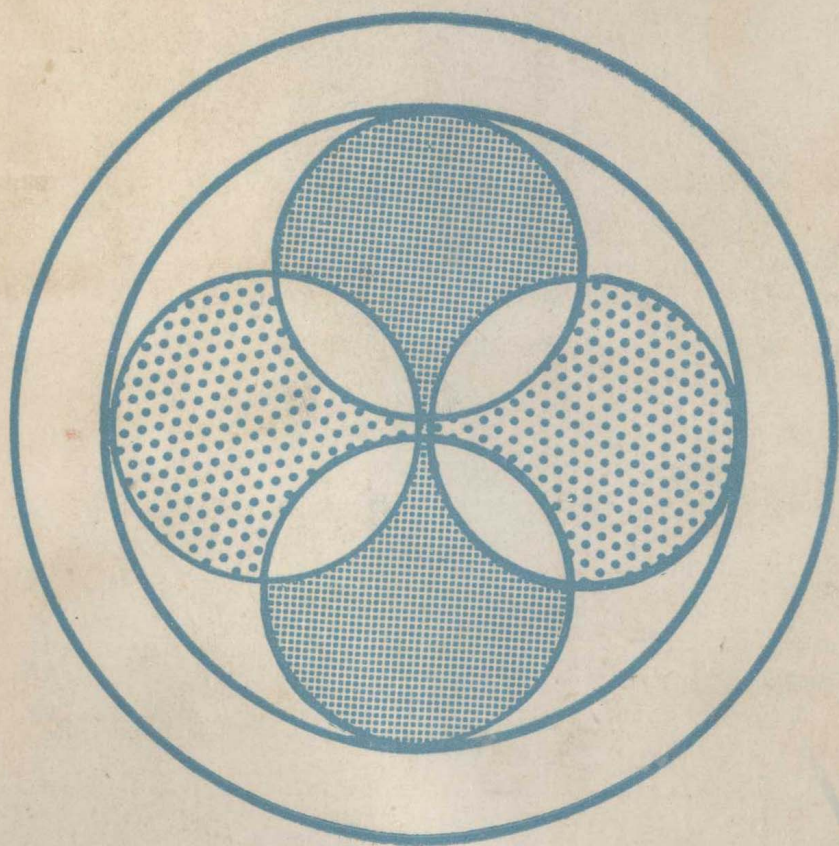
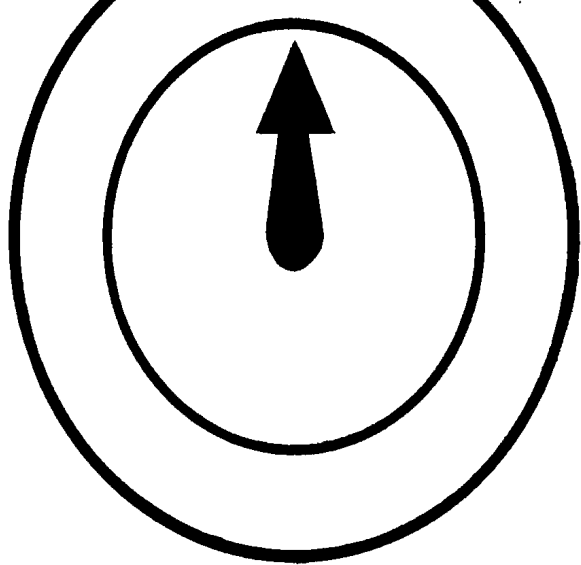


大和勇三

1かね 2ワイフ 3出世





1かね 2ワイフ 3出世



著者紹介

昭和12年、早大卒、日本経済新聞入社、マニラ支局長、
論説委員、社会部長、婦人部長を歴任。この間に、ヨ
ーロッパ特派員として、フィンランド、スウェーデン
ノルウェー、デンマーク、西ドイツ、イギリス、フラ
ンス、スイス、イタリアの9ヵ国を歩き、編集局次長
を経て、現在、理事、論説副委員長。

著書には、『上役・下役・ご同役』（中央公論）、『顔』
（改造社＝読売新聞良書ベストテン賞受賞）、『魅力の診
断』（東洋書館）、『魅力学入門』（白風社）、『生活手帖』、
『心の持ち方』、『こころの事典』（いずれも池田書店）、
『マナービル専科』（東洋経済新報社）その他がある。

1かね・2ワイフ・3出世

定価 290 円

昭和37年9月10日 第一刷発行

著者 やまと ゆうぞう 大和勇三

発行者兼印刷者 綿野脩三

印刷所 東洋経済新報社印刷工場

発行所 東京都中央区日本橋本石町1の4 東洋経済新報社

電話東京(270)代表4111 振替口座東京6518

© 1962. <検印省略> 藩丁・乱丁本はお取り替えいたします。 0432

自序

ここに集めたさやかなお話は、語りたいままに語った小話である。どんなジャンルに属するかは筆者自身もわからない。しいていえばコントの姿をした小評論でもあり、小品の顔つきをした随筆でもある。とにかくジャンルのはっきりしない鬼子である。

しかし生活を愛し、仕事を愛するサラリーマンの哀歓を、家庭生活と職場生活にわたってこまかく、掘り返してみようというねがいをこめてある。くらしの中の哀感、楽しみ、怒り、喜び、抵抗、満足などをみつめて、サラリーマンぐらしのヒダを浮き彫りにしようとしたものである。

サラリーマンの心の振り子は、案外に、極端から極端にゆれがちである。たとえば、出世についての考え方も同様だ。一方に、出世亡者があるかと思えば、他方には、出世には背を向けた姿勢の反出世主義者がある。

古い出世主義とは、社内の昇進をめざす以外に眼中何物もなく、仕事に仕えるのでなくて、上役のおひげのちりを払い、鼻つき合わせた同僚の足をひっぱったり、小またをすくったりするケチな野郎の生き方である。

サラリーマンの正当な昇進は、立派な仕事、誠実な努力の続行の結果として自然に来るもの、しかも、昇進の効果は、よりいい仕事を拡大できるところに味がある。昇進に恵まれたら、すこしも遠慮しないでもよろしい。それなのに、出世亡者を憎むついでに出世否定の姿勢をとる人がいる。本当の出世は仕事から出発するが、亡者の出世は「出世」から出発する。逆立ちした出世主義である。ここが大違いである。

ところが、最近、また、別の意味で、正当な出世街道にも異変が現われた。昔流の昇進コースがせまくなり、出世のテンポもにぶり始めている徴があつて、若いサラリーマンは、意識するしないにかかわらず、若干のとまどいを始めている。若いサラリーマンはゆらいでいるのだ。この人たちの間では出世の株価が下がり始め、逆に、生活第一主義の方向に重傾斜する傾向も目だっている。サラリーマン理想像が、仕事の鬼から、家庭のよきパパ、会社勤めはスイート・ホーム作りの手段とわり切る傾向も強くなりつつある。

一かね・二ワイフ・三出世という文句はこういう若いサラリーマンの、生活中心主義をひとくちでいいつくしている文句だ。おかねを貯め、美しいワイフとすてきな家をもって生活をエンジョイし、出世は二の次、三の次という気持ち、できればするが、できねば、しなくてもいいという姿勢である。

反出世主義は、古い出世主義の無責任さ、仕事二の次方針を否定している点では進んでいるが、さて、生活主義にとじこめるのも、また極端な振り子のゆれ方であるといつてよからう。

たしかにくらしを愛することも大切だ。しかし、それも、出世を否定する気持ちのうら返しではない。つまり、逆立ち出世をにくんで、ついでに、自分の立派な仕事までまきぞえにして、軽く扱う姿勢になることは、明らかな行きすぎだ。

仕事はあなたをみがく砥石であり、あなたの心身を一番安定させる栄養素でもあり、あなたをささえる太い支柱でもある。仕事は、会社の仕事でも、実は、あなた自身の仕事でもある。

生活を愛し、逆立ち出世ならぬ仕事を愛するという中庸のコースに、はつらつとしてニヒル臭くないこれからの若いサラリーマンの正姿勢がある。

ここに登場する人物、多田太助や月形半平は、あなたの職場の中からさがして来た、いろいろな人物の合成品である。相似た人物を思いうかべて、親近感を抱いてももらえたらあわせてうれしい話である。

昭和三七年八月

大 和 勇 三

目次

男の銘柄、底値のとき	三
ご同役	三
以心は伝心せず	三
下役	三
寒夜も寒くない話	一七
上役	一七
パチンコ株	二三
ひるやすみ	二三
ミクロ経済学	二〇
ひるめし	二〇
遅刻とひげそり	セ
遅刻	セ
レース・ブームに涙ありき	三
万事出だしが肝心	一
出勤	一
自序	i

ストレス 六

紙のカーテン 二六

同姓社員のハチ合わせ 三〇

ひも一本の不覚 三三

関 三六

関部長・関次長 三六

つきあい 四〇

三・二・一の新原則 四〇

家路 四三

銘柄観光 四三

パリの空の下セースは流れ 四五

月給袋 四九

ムードじゃお金は残らない 四九

百石三人扶持 五三

少女趣味かもしれないが 五五

ボーマス 五八

千円札のおもみ 五八

出張 六一

Sarumata Y&M 六一

宴 会	壹
一億円芸者	壹
社内旅行	究
純情派サラリーマン	究
ガスの火は青かった	七
ボタンと愛情	七
即日二度の登山の話	七
趣味	〇
土一升・金一升	〇
買い物	〇
万事こどもに負ける時	〇
月 賦	六
月賦劣等感	六
貯 金	六
小の虫を殺すべし	八
マメ・マネービル	三
ワリカン	六
ワリカン魔	六
ポケット・マネー	二

ご愛嬌投資家	一〇〇
マネービル	一〇三
買わずぎらい	一〇三
気になるのはひとの持ち株	一〇五
資産株よりお産株?	一〇八
消費費	一一一
海とクジラと外国と	一一一
大消費ブームの年明けて	一一三
贈り物	一二七
たらい回し時代の憂鬱	一二七
ハートを打ち抜くプレゼント	一二三
ガッチリ・プレゼント	一二四
家	一二七
城をもつまで・もってから	一二七
団地すまい	一二三
女まさりのサラリーマン	一二三
納税	一二四
株式談義も時の氏神	一二四
転勤	一二七

冬花火	一三七
縁談	一四〇
新男性鑑別法	一四〇
新婚	一四三
紙テープの格さん	一四三
ジャストマリード	一四四
愛情	一四六
たけくらべ・昭和版	一四八
対女房作戦	一五〇
マッチに揺れる明暗のかげ	一五〇
禍福はめぐる真珠一粒	一五〇
妻に本心吐露するなかれ	一五三
倍增時代というけれど	一五五
奥様ご機嫌回復法	一五六
逆攻勢・逆々攻勢	一五七
家計簿	一五八
家計簿をめぐる虚と実と	一五九
対亭主作戦	一六〇
ご亭主のおもちゃ	一六九

内職	一三
内職は時の氏神	一三
こども	一六
家産「一億二〇〇〇万」?	一六
出世	一八
社長の出世	一八
旧式出世戦術	一九
小せがれ部長	一九
1 かね・2 ワイフ・3 出世	一九

(表紙デザインおよびカット 鮎沢まこと)

勤

万事、出だしが肝心

出



朝の出がけのほんのちょっとした手違いから、一日中、スラン
プになることがある。サラリーマンによくあるのは、あたふたと
急いでとび出してきたはいいが、パンツの前後を間違えて、はい
てしまうこと。さて、会社へきて何だか変だと気がつく。調子が
わるくて他人との応対もうまくゆかぬということになる。

サラリーガールにも、こんなことがある。ある朝、金野星子は少々寝坊して、お化粧もそこそこ
家を出たが、混み合う電車の中で押しつ押しされつしているうち胸の具合が変だと気がついた。彼女は、
ブラジャーの下に隠れているパットを、一方だけ入れて、片方は入れ忘れてきたのであった。アラッと小
さくつぶやいてひとりぼつと顔を赤くしたのである。パットの片方を入れ忘れたからとて金野星子の

ような、目のパッチリと涼しい美人の魅力が、減じるようなことはない。だけれど、その日は何か小
さいことをやっけていても、ちよいと手のひらで片胸をおさえたくなる。気が散るのだ。星子は果たせ
るかな三つの失敗をやってしまった。

最初のエラーはこうだ。会社の大事な用の外出で、タクシーをとばしたのはいいが、おきまりの悪

道路にさしかかったとき、タクシーが大きくバンドした。いつもの星子なら、ぼんやりしてはいないのだが、その日は、タクシートの天井へぼいんと頭を打ちつけた。

第二のエラーは、昼休みのできごと。きのう貰ったボーナスを割いて、お中元品を買い、近くにいるお友だちには、手にさげていって贈り、遠いお友だちには百貨店から送ってもらったのである。ここまでではよかったのだが、近くのお友だちの銀野鈴子から、すぐに電話がきた。

「金野さん、さっきはすてきな品物、ありがとう。ところで、あんたお金持ちねえ、紙袋の中にお財布まで入れて、私にくださるの」

つまり、お中元品を大紙袋に入れてさしあげたが、買い物中に自分の財布をそこにいっしょに入れて歩いていたのを忘れて、セロテープで封じこんでしまったという次第であった。

「きっと、これも、パットのせいよ、私ってどうかしてるわ、きょうは」

一度あることは二度あるのたえ、わるいことはつづいて起こるものであると、ごへいをかついで、星子さんは、五時となると早々に家に帰ってきた。これで一日の厄払い、ヤレヤレと、片方のパットを探すと、何のひょうしか、鏡台のひき出しにちょこんとおさまっていた。

翌日。こんどは、しっかりと身づくりをして出かけた。きょうは、心気引き締まって、万手おちなしにやれそうと、はり切っているところへ、お中元品を送ったもう一人のお友だち、赤金照子からの電話である。

「金野さん、かわいいお中元、どうもどうも。だけれど、あなた大ミスしてるわよ。住所が違っていて、ご存じの鉄原花子さんのアパートへ舞いこんでいたの。花子さんが、私のところへもってきてくれてね、金野さんたら、私にはまだ送ってくれないんだけど、こんなすてきなオルゴール、私にもくれないのかなア」といっていたわよ」

さあ、大変。何をボヤボヤ川端やなぎ、私ともあろうものが宛名をまちがえるとはとあわてたが、こうなった以上、鉄原花子さんのところへも同じものを贈らぬと、柳眉が逆立つてあろう。実は、別な値ごろのものを、手もちしていたのだが、これでプランを変更し、別途追加支出をせねばならぬハメとなった。星子さんは財布をのぞきながら、つぶやいた。「これもパットのせいよ、きつと」

レースブームに涙ありき

新聞雑誌の婦人欄では、夏のおしゃれはレースとうたい、百貨店もレース生地 of 逸品会などを催せば、レジャーブームの先端をゆくご婦人がたが、どうして、レースブームを巻き起こさないで済むことがあろう。むかし、むかし、レース発祥の地は、文化貴族の国フランス。レースの持ち味はまた、豪しゃで、貴族趣味のもの。レースを透かす下着の風合い、見た目に涼しいとあれば、レースがとぶように売れてもさのみ不思議はなく、多田太助のうちでも、女房あり、娘あれば、今夏のおしゃれに

レースを仕込んでくるのも無理はない。

ある日、太助夫人は水いろの花模様、長女もナマ意気に藤むらさきのレースをかかえて帰ってきた。

「中年向きはツーピースよ」

「あたしなら、ワンピースでもいいでしょ」

と、鏡台の前にかわるがわる立つては肩にひっかけて、しばしファッション・ショウをやり、

「端切れは、何にでも使えるわよ。そうだ、お人形のドレスの裾にもつけてやる」

とうきうきしているありさまは、家中、レースの氾濫が予想されるしだいであった。

それから数日後。

太助が目下愛読中のおんな歳時記という一本のへそくりの項を読み終わって、さて、寝入ろうかととりだす枕を見ると、きのうまでなかったものがついている。女房のドレスの裁ち余りと思える水色の花模様のレースがつけられていたのである。亭主のボータスから買い込んだのか、ヘソクリをとり出しているのか知らぬが、とにかく買い込んだレースのちょっぴりのお裾分けを太助の枕にしてあったのである。

ところが、このお裾分けサービスがすぐに意外な事件を生むことになるうとは、さすがの太助も考えなかった。

ある日の朝。太助は客筋との懇談会へ出席する約束があった。どれ、ゆっくりとおちついて、ひげ

をあたらうと、鏡にむかったところ、額から左ほおにかけて、あざやかに、花模様のがとが、深々とついている。つまり、レースのフチ飾りつきの枕の仕方がわるかったのだ。レースの花模様に、顔を押しつけて寝ていたらしく、花模様が皮膚にほり込まれてしまっているのである。「やれやれ、えらいこった。こんなしるしをつけては、外出はできん」

太助は、ひげそりもそこそこに、手のひらで「花模様」をもんだり、こすったりしてみたが、皮膚は赤くなるだけのことで、模様はいっかな消えない。切られ与三じゃないけれど、面にうけたる看板にもならぬ情けないでいたらくである。

「おい、むしタオルこしらえてくれ、いそいで」

太助がどなったのも無理はない、定刻にはあと一時間ちょっとしかなく、短期花模様消滅法を講じないと困ったことになる。

ところが、こんな時には、娘などというものは役にたたぬもので、

「ハハハ、あんなものついてる」

なんて笑うのも小憎らしい。

むしタオルで蒸し、皮膚を押ししたり伸ばしたりしているうちに、やっと花模様は浅くなったが、まだ少々見える。だが遅刻は出来ぬ身の上、ままよと太助は意を決して身仕度し、玄関を出た。さて、タクシーの中でおでこやほおをなお揉みつづけている太助の目つきは笑うにも笑えぬ真剣なものだっ